

「道」の記憶を求めて、 北国上街道をゆく。

写真・文 タカヤチキユタカ

車社会、大量消費社会を前提に作られた日本の国道沿いには、全国どこに行っても同じ郊外型ショッピングセンター、コンビニ、ファーストフード店、メガネ屋チェーン店等々が立ち並び、そこにはその土地の風土、歴史の匂いはあまりに希薄だ。一方で、古代から引き継がれてきた旧街道には、「道」を作った人、往来した人、戦った人、守った人、信仰を広め・求めた人たちの記憶が蓄積されていて、その「道」を通ると数百年に渡ってその「道」が記憶してきたモノ・コトの断片を垣間見ることができるよう気がする。失われつつある「道」の記憶を、記録に留めておきたいと思って、北国上街道を福井県側から手取川まで辿ってみた。

北国上街道

石川県内を通る、いわゆる一桁国道「8号線」。その歴史は、古代、奈良・京都から北陸に至る道としての「北陸道（ほくろくどう・ほくりくどう・くぬがのみち）」に遡る。古代において加賀、能登は渤海国（中国東北部）との交渉拠点として、また越後は対北蝦夷の最前線として重要な地域だった。

古代、中世を経て江戸時代。加賀国にはいくつかの街道が通っていたが、その中心は金沢と江戸を結ぶ北国街道だった。この北国街道には、金沢から越中、越後を経由し、信州を経て江戸へ至る経路と、金沢から越前を通り、中山道を経由する経路があり、この内、最初の越中・越後を通るものは「下街道」と呼ばれ、越前から中山道を経由する道は「上

街道」と呼ばれていた。

加賀前田家も、その分家の大聖寺藩でも参勤交代では北国街道を使ったのだが、そのほとんどが越中・越後を抜ける「上街道」であった。

下街道の行程は約480キロ、上街道は中山道を経由する経路で約660キロ、日数にして3、4日違うから、越後国境近くの有名な難所「親不知」が波浪で通行不可の場合などぞ除いて、下街道を使うのは当然だっただろう。そのためか、石川県の北国街道の資料の大半は下街道に関するものとなっている。

曲がりくねった北国街道の両脇に松が植えられたのは、慶長9年（一六〇四）、加賀藩二代藩主前田利長の命によるが、

それらの松は太平洋戦争の初めに航空機用燃料の原料「松根油」の採集目的で伐採されてしまった。そして昭和16年頃、軍用道路としての利用のために、幅員の広い直線化した新しい道路が造られて「国道8号線」に指定された。以降、旧街道は千年以上に渡った大きな役目を国道に譲り、今その面影は僅かに残されているだけとなっている。